

【脊椎脊髄病医への忙中有閑コラム】

雑感

東京女子医科大学教授 附属八千代医療センター整形外科診療科長 水 谷 潤

早いもので名古屋を離れて5年半が過ぎた。2020年9月、縁もゆかりも全くない千葉へやってきた。COVID-19初年である。今でも名古屋へ月2回ほど帰るが、あの頃は新幹線は貸切同然、1両に数人しか乗っていなかった。緊急事態宣言という言葉が懐かしい。

ある日、東京女子医大整形岡崎主任教授からオファーがあった。“附属八千代医療センターでの脊椎診療が2年空白となってしまっており、地域医療への影響、何より経営面での落ち込みをなんとかしたい”と。

東京女子医科大学附属八千代医療センターは初代院長として東京女子医科大学名誉教授伊藤達雄先生が設立から関わられた病院である。伊藤先生からもお声がけを直接いただいた。大学病院としての役割と地域の最終病院としての役割を併せ持つ病院である。いろいろと悩んでみたが、心機一転また頑張ろうとオファーをお受けした。

着任当初から脊椎診療を軌道に乗せなければならなかったが、脊椎疾患の患者さんは多く、すぐに脊椎手術件数は増えていった。すぐに整形外科は着任前の約2倍の増収となった。

何よりも、着任当初のコロナ禍の中においても、平均して月に2人ほどの患者さんがわざわざ名古屋から私の手術を受けにきてくれた。緊急事態宣言の時でさえも、2年ほどはこのペースが保たれていた。その後も月1人ペースが続いた。さすがに現在では減ってきたものの、それでも今なお遠くまで手術を受けにきてくれる患者さんがいる。感謝。

—『やらないこと』『やれないこと』『やりたくないこと』『やれること』—

大学勤務が長く続いていることや、レジデント時代も地域の最終病院で勤務したためか、困っている患者さんに対してどんな困難な病態であろうとも、最終的には自らの手で手術を行い患者さんと向き合おうと考えてきた。高難度手術もできるようにならねばと研鑽してきたつもりである。麻痺が生じたらどうしようなどと怖気付く自分を時として奮い立たせながら、責任の重さに潰されないよう立ち向かってきたつもりである。

自分自身を振り返ると、駆け出しの頃と現在とではできる手術に大きな違いがある。当たり前である。懐の深さとも言えようか。

整形外科疾患は重度骨盤外傷などごく一部の症例以外、手術が生き死にに直結することはない。例えば、消化器外科悪性腫瘍手術では、どう考えても手術適応外という場合を除き、手術をやらなければ患者さんを助けることはできない。外科医自身も逃げは許されない。

一方で脊椎手術はどうであろうか？きちんとした手術が行われたとすれば、症状が改善する、たとえば、単純な腰部脊柱管狭窄症でも、“この程度なら手術やらなくても良いですよ”と主治医が言えば、経過観察がまかりとおる。患者さんは困っているにも関わらずだ。高難度成人脊柱変形手術や基礎疾患の塊のような患者さんにおいてはなおさらではないであろうか？自らの技量がないために、あるいは困難な病態から逃げたいために、面倒くさいシチュエーションに顔を突っ込みたくないがために、“まだ

様子みても良いですよ”“手術は必要ないですね”ということもまかりとおってしまう。

やったことがないから、やれないから、という思いが悔しくて脊椎手術の道に進んだのかもしれない。ホントにこんな手術やっていいの？やれるの？というクエスチョンに答えを出すには自分自身が、きちんと勉強し知識をつけ、先輩から学び、そして実際に手術ができるようにならなければ答えを出すことはできない。やったことがないまま評論家のようなことを平気でいうような外科医にはなりたくないと思ってここまでできた。もちろん、手術を行うということは、行わないよりも大きな責任が伴うことはいうまでもない。

—『名古屋は旨い』—

関東の食にも慣れてきたが、名古屋は本当に旨い。

名古屋の味は“濃い”とよく言われる。確かに“濃い”。しかし、ただ単に“濃い”のではない。深い出汁や素材の旨さを十分引き出した上での“濃さ”であることに気づいた。

東京で“旨い”とされる食事どころでも“しょっぱい”と感じる。私だけでなく、いつも妻も同じ感想を述べる。“美味しいけどしょっぱいよね、塩味が強いよね、なんか

もったいない”と。確かに美味しいが素材の旨み“が、しょっぱさの濃さ”で消されてしまっているように感じる。名古屋の“濃さ”は、出汁の深い旨みと素材の旨みの濃さである。たとえば味噌煮込みうどんの赤味噌。豆みそのこくと出汁の深みとが織りなす“濃さ”でありしょっぱさや辛味だけの表面的な“濃さ”とは全く違う。名古屋生まれ育ちであることに感謝。

—『まだまだ頑張る』—

体力的には長時間手術はかなりキツくなってきた。しかし、困難症例に今まで以上に向き合い、歳には負けないぞ!と思っている。暦年齢よりも若々しい老いを目指すぞ!

幸いよき後輩にも恵まれ、私を含めて当院の脊椎外科は現在4名体制となった。年々地域の信頼も厚くなり脊椎手術件数は増え続けている。

千葉大や他大学の関連病院に囲まれながらも仲良く仕事をさせていただき、困難症例や基礎疾患いっぱい症例をご紹介いただけるようになっていく。

病院の仕事も任されるようになってきた。さらに、SWJ2028での日本成人脊柱変形学会の重責も控えている。もうしばらく頑張っていこうと思っている。